

学校だより



# 伸びゆく子

令和5年10月31日  
横浜市立中沢小学校  
11月号

## 『勝負との付き合い方』

副校長 正木 俊行

10月22日に行われた中沢小学校第53回運動会には、ご多用の中、多くの保護者の皆様、地域の皆様にご参観、ご声援をいただき、ありがとうございました。帰宅後のお子さんの感想は、勝って嬉しい。1位になって嬉しい。だったでしょうか？ それとも負けて悔しい。だったでしょうか？ 2点差で白組の勝ちという結果発表直後の歓喜に湧き上がる白組と茫然自失の赤組の対照的な反応が目には焼き付いています。(昨年度は確か1点差で紅組の勝利だったでしょうか?) いずれにしても運動会やそこへ向けての取り組みが、お子さんの成長にとって、有意義なものになってくれていると信じています。

プロスポーツやアマチュアスポーツのトップレベルの選手は、生活や人生をかけて勝負にこだわっています。時には1つのプレーの判定を巡って乱闘にまで発展する場面は、あまりスポーツ観戦に興味がない方でも、きっとどこかでご覧になったことがあると思います。

実は子どもも非常に勝負にこだわります。休み時間のドッジボールでさえ、その勝敗を巡って大喧嘩になることがあるくらいです。私が今まで担任してきた子の中にもそういった負けず嫌いな子がいました。体育の授業のラインサッカーで負けて、地面に突っ伏して、こぶしで地面をたたきながら泣いていた子。ハンドベースボールで負けて、チームメイトを罵っていた子。リレーで負けてバトンを地面に叩きつけて折った子。どの子にもその子に応じた指導をしました。

勝ちにこだわって活動に取り組むことはとても素晴らしいことだし、活動を持続する原動力になります。また、勝つことを目指すことで、目的意識をしっかりともち、技能や作戦を向上させようという意欲が高まります。チームプレーであれば、その上団結力も高まり、勝利を勝ち取った時の、充実感、達成感は大変なものになります。

しかし、勝者は最大でも半分です。対戦相手が増えていけば、勝者の割合はどんどん減っていきます。こうした現状を踏まえれば、我々は、勝敗のあるゲームや対戦をした時には、必ず負けた時の対応を考えておかなければならないと思います。これは、「負けてもいいや。」という気持ちで勝負に挑むのとは違います。絶対に勝ちたいと思って勝負に取り組むけれど、負けてしまった時にはそれを真摯に受け入れる心構えが必要だということです。

学校教育の中では、勝つために倫理的、道徳的な感性を捨て去るのではなく、倫理観、道徳観、相手への尊敬や感謝の気持ちを育てるために「勝負」を利用していききたいものです。

そして勝負を取り入れることで、様々な活動を通して楽しさやワクワクを味わうことができます。私はここには、偶然性がどうしても必要だと思います。勝負をしても必ず負けるとわかっていたら、とてもつまらないです。でも、必ず勝つと決まっているゲームも意外とつまらないです。また、努力や作戦、工夫、練習は、勝利に近づくものではあるけれども、勝利を約束するものではありません。

私は、小学校4年生まで団地暮らしでした。団地では、様々な年齢の子と一緒に遊ぶことが多くありました。そんな時は、ハンディをつけたり、特別ルールを設けたりして、誰もが勝利への希望をもって取り組めるゲームのルールをいつも考えていました。その時のいろいろのハンディや特別ルールを作った経験は、子どもたちと一緒に遊ぶ時のルール作りや教師になってからの体育学習のルール作りにとっても役立ちました。

勝利を目指してゲームや対戦をすることはとても楽しいことです。負けたら悔しいです。当然です。でも負けてもまた、勝利への希望と期待をもってゲームや対戦に取り組みたいと思えるような心を学校では育てていきたいです。